

斎藤茂吉と青山脳病院院長（２）

—昭和３年から昭和８年まで—

小泉 博明

日本大学大学院総合社会情報研究科

Mokichi Saito and the Director of the Aoyama Psychiatric Hospital (2)

—From 1928 to 1933—

KOIZUMI Hiroaki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

As the director of the Aoyama Psychiatric Hospital, Mokichi Saito tried to maintain the hygienic environment in the hospital he had rebuilt. However, he was troubled by the number of patient suicides. Though the hospital did an excellent job of covering in-patient care according to all accounts, families lodged complaints against both Dr. Saito and the hospital for inadequate monitoring of the patients. He came to hate suicides to the extent that even a newspaper article about an unrelated suicide would upset him thoroughly. In his personal life, Dr. Saito's health worsened with the advance of his kidney disease. In addition, his wife Teruko was involved in a scandal that caused Dr. Saito great public humiliation and led to couple's separation. However, he never waived in fulfilling his responsibilities as the director of the hospital and as a doctor to his patients.

1. はじめに

青山脳病院の創設者である養父紀一が1928（昭和3）年11月17日に死亡した。よって、名実共に斎藤茂吉が院長と同時に経営者となり、その責務が双肩にかかった。茂吉の経営手腕は、古参の職員も多く、当然ながら紀一と比較された。性格的には大言壮語の紀一に対し、謹言実直の茂吉と評されよう。また、紀一は精神科の臨床医として、類い稀なる才能と言動を体現していた。次男の宗吉（北杜夫）は、「紀一は、確かに口先がうまく、成上り者で貴族趣味の俗物であったが、臨床医としてなかなかの腕前ではなかったか。患者の頭に聴診器をのせ、或いは耳に耳鼻鏡をつけて覗きこみ、（略）巧妙な口説療法（ムント・セラピー）の一つだと言えよう。」¹という。これは、茂吉には期待できないことである。長男の茂太は「茂吉は養子だったから、なんとしても先代の築いた栄光を汚すことはできない。その反動か、茂吉はいつも苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。おまけに癩癩もちだったから、家族一同いつもピリピリし

ていて、家の中も病院も、けっして穏やかで心地よいとはいえなかった。」²と回顧している。茂吉は笑顔で病者と接するというよりも、真剣に病者と向き合っていたといえよう。本性はユーモアの精神に富む茂吉が、常に苦虫をかみつぶした顔をしていたので、院長就任前後の激務を勘案すれば、精神的な余裕は殆どなかったのであろう。茂吉は、次のように歌う。

郊外の病院に来て夜ふけぬ田の蛙のこゑ減るにけり
水に住むこまかき蟲は病棟のたかき燈にしばし群れける
おしなべてつひに貧しく生きたりしものぐるひ等はここに起臥す
むらぎもの心ぐるひしひと守りてありのまにまにこの世は経べし
さみだれの暗く降りしくきのふけふ心はりつめて事にしたがふ

（『ともしび』昭和3年「C病棟」）

さて院長ともなれば、開業医との交流などもあるが、茂吉は、今までは紀一にすべて任せていた。1929（昭和4）年1月29日の茂吉の日記には、次のようにいう。

天神ノ花ノ家ト云フ家ニ行ク。チツトモ面白カラズ。ツマリ開業医ト云フモノハ毎晩カクノ如クニ酒ヲノマザルベカラズトセバ厄介ナルモノナリ。ツマリ、サウ云フコトモーツノ勤トセバ、ソレモ開業ノーツノ作業ト看做シテ可ナランカ。

3

このように茂吉には、開業医との交流が負担となっている姿がうかがわれる。同年2月17日の日記には、次のようにいう。

ソコデ自動車ニテ本院ニ来リ、□□□□□（五字削除）ノ死亡ニツキ、地方裁判所ヨリ、枇杷田検事、松南予審判事来リ。証人トシテ訊問アリ。午前三時ニ至ル。家ニカヘリタルハ四時近カリキ。遺骸ハ一夜オキ明朝東大ノ法医学教室ニテ解剖スル筈ナリ。警察署員ノ一人云フ『院長ハカウイフコトガアルノヲ知ツテキテ外出シテキルノデスカ』云々。僕思フ。院長モナカナカ面倒ナリ。困ツタ商売ナリト。⁴

長塚節追悼歌会に参加したが、夜の10時に終わり、その後徒歩で青山まで帰宅した。病者が死亡しているのに、警察は院長が不在であったことを責めているのである。茂吉は「院長モナカナカ面倒ナリ。困ツタ商売ナリト」と赤裸々に記している。翌日の日記には、東大法医学教室での解剖を「法医学教室ニ行キテ三田先生ニアフ。（略）一時頃ヨリ宮原博士、佐藤為彦氏等ニテ解剖シタル□□□（三字削除）ハ粟粒結核ニテ腹膜一面ニ粟粒結核アリ。ソレデキテ肺ニハ著変ナシ。肝臓ニモ著変ナシ。（略）」⁵と記している。

2月21日の日記には、次のようにいう。

5. 午食シテ作歌セントシタルガ成ラズ。三時ゴロニ本院ヨリ電話ガカヘリ、警視庁ヨリ電話ニテ院長ガキルカ、青山ノ方ニキルト云フト、本院ニハ何日ト何日ニツトメルカ。青木、斎藤、薬剤師等ハ何日ニツトメルカ。ソシテ用事ハ直接ニ院長ニ話ス。コレハ板坂ガ取りツギマセウト云ヒタル返事トゾ。ソレカラ五時ゴロニナリ、

世田ヶ谷署ノ手ヲ以テ廿三日午前十時ニ警視庁ニ出頭セヨト云フコトナリシトゾ。

6. 六時近クニ青山会館ノ青山署ノ新旧署長ノ送迎会ニ出席ス。洋食ヲ節シテ食ス。会費三圓也。

院長たる者は、所轄青山署の署長送迎会にも出席せねばならない。茂吉の苦手な社交儀礼があったようである。情報交換という名目の警察署との付合いも、院長にとって重要な職務であった。2月22日の日記には、次のようにいう。

1. 自動車ニテ朝ノ九時半ニ本院ニ至ル。改築ノコト看護ノコト。雇人ノコト。料理ノコト等ニツキ監督セリ。而シテ夕ニ至ル。

2. 病人数名ヲ診察ス。

さて、当時の精神病院の状況を見てみよう。菅修は、東京府松沢病院に1927（昭和2）年11月30日に医員として就職した。菅が「呉先生をしのぶ会」の座談会で、当時の精神病者の動向を、生々しく次のように語っている。

わたしが、松沢病院にきた頃は（昭和2年頃）、患者の生活は全く惨憺たる状態で、病室は荒れはててるし、それからノミとシラミの巣窟であるし、ある患者なんか、足袋にシラミを飼っておいて、そして、友達がいらないもんだからシラミを前に話をしている。（略）生活がひじょうに悲惨であって、西2病棟（慢性病棟）を最初もたされたんですが、患者は全然外に出さないわけです。せめて1週に1回でも、外に出そうかという話をもち出したときに、“逃走したらどうしますか”ということになって、看護科のほうからだいぶ、どうも横槍が入ったんだけど、とにかく外に出そうということで、最初、西2病棟の1室から1回ずつ外に出すようにしたこともあります。

それから食事の時はどういうふうであるかというと、廊下へずらっと並んでいて、そこに乞食が飯をくうみたいに、とにかく、じつに悲惨な状態で、ご飯をたべていた時代もありました。それで、東3病棟（慢性・不潔病棟）の物置を改造して、あそこに始めて食堂を造ったようなことがある。あとで勝手に造ったといって、叱られたことがあるけれども、（略）。⁶

昭和2年に、茂吉は青山脳病院院長に就任したが、同時期の東京府松沢病院の状況である。まず、閉鎖的な病室の劣悪な衛生環境には驚愕する。しかも、廊下で食事をするため食堂すら無かったのである。そして、精神病院で最も危惧したのは病者の逃走であった。精神病患者にとって有効な作業療法は、病院には病者が逃走するという危険性を常に抱えていたのであった。茂吉に、次の歌がある。

一夜あけばものぐるひらの疥癬に薬のあぶらわれは塗るべし

(『ともしび』昭和3年「折に触れつつ」)

病室のノミやシラミの駆除は十分でないと思われる。当時は、なかなか良好な衛生環境が期待できないのである。菅修は次のように続ける。

看護科のほうで一番ご心配の種は、患者が逃走することであって、逃走すると当局の方から、やかましい監督があるし叱られる。で、患者が逃走すると、まず衛生課長のところに電話をして、真夜中でも報告しなきゃならない。衛生課長のところへ報告がいくのは、いつも患者が逃走した時ばかりなものですから、それで、患者の逃走ということが、ひじょうにやかましいような時代で、そういうふうな時に作業を行なうということが、ひじょうにむずかしかった。(略) 呉先生ができるだけおおくの患者を出そうといわれた考え方が、三宅先生に受けつがれ、(略) 作業のほうがだんだんと発達するようになり、作業療法医長というものができあがるようなところまでいったわけです。要するに、作業療法も一つの患者の人間的扱いの現れとしてみることもできるわけです。まあ、それと同時にレクリエーションであるとか、運動会であるとか、いろんな患者の扱い方がよくなったわけです。⁷

内務省、警視庁、警察署という衛生行政の流れのなかで、とくに精神病院においては、病者の逃走が対外的に煩瑣な問題を惹起するのである。一方では、作業療法が着目され、病者の人権への配慮が推進されつつあったのである。この両者の狭間で、茂吉は院長として、一人の臨床医として、その均衡をどう図るべきか苦悶せざるをえなかったのである。

2. 病者の自殺

自殺せしものぐるひらの幾人をおもひだして悪みつつき居り

(『たかはら』昭和4年「一月某日」)

精神病医というよりも院長として茂吉は、病者の逃走に数多く悩まされたが、あくまでも対外的な問題である。これに対し、病者の自殺ほど、担当医として悲哀と痛恨の重なるものはなかった。縊死により自殺が多く、場所は便所での自殺が多かったようだ。1929(昭和4)年1月22日の日記で、茂吉は次のようにいう。

早朝ニ電話ガカヽリ。□□□□(四字削除)氏ノ弟君遂ニ自殺ヲ遂グ。非常ニ注意シテキタノデアルガ、看護人ガ傍ニ寐テキテカクナリタルハ残念ナリ。⁸

精神病医は、担当の病者の自殺が宿命でもあった。茂吉は、呉秀三院長の許で巣鴨病院に勤務していた頃から、この自殺に直面した。巣鴨病院でも茂吉は、深夜に鉄で喉を刺した病者の縫合をした体験もある。精神病患者は過激な手段で自殺を図ろうとする場合がある。病者が自殺すると、深い呵責に苛まれるのであった。巣鴨病院では、一人の医者であったが、青山脳病院院長ともなれば、すべての責務を負うこととなった。自殺者の家族の中には諦めきれずに、院長に面会を求めることもある。1928(昭和3)年12月13日の日記では次のようにいう。

1. □□□□(四字削除)氏ノ伯父ト称スル木村末松ト云フモノ来リ、イソガシク僕ノ外出セントシタル處ニ面会ヲ求メ。□□(二字削除)氏ノ自殺ニツイテアキラメガツカヌノデドウニカシテモラヒタイト云フコトヲ云ツタ。僕ハ道理ヲ云フテ帰シタリ。⁹

どのように道理を言ったのかは詳らかではないが、労苦が絶えない。後に、茂吉の『癡人の随筆』に「自殺憎悪」という章がある。

この自殺については、世人は餘り痛切に感じてゐない。家人に自殺者があっても、惜しいことをしたと云って嘆けばいい。他人ならばただお気の毒だぐらゐでよし、さもなければただの話題の材料にしてい。然るに精神病医の吾々には、さう簡単に行かぬ

ことが多い。自殺する者は勝手に自殺するのだから、法律からいっても何も吾々に罪は無いのだが、家人などいふものは一から十まで吾々に罪があるやうな顔付をすることがある。（略）
巢鴨病院時代はただ職員の一人で責任者に院長が居るから、まだ気が楽な點があつたが、自分が院長になって見るとまだまだ気苦労である。そして自殺する者の具合を見てゐるに、やる者は何時かは遣つてしまふのが多いし、何でもなくやる者がある。世間の健康な人達が常識で考へるやうなものではない。

私はそのころ、一面は注意上の心配をすると同時に、自殺者をいつのまにか憎むやうになった。如何にしてもいまいまして叶はない。彼等は面倒な病氣を一つ持つてゐて、医者も看護人も苦心惨憺してゐるのに、なほそのうへ勝手に死んで心痛をかけるといふのが、いまいまして叶はんのである。自殺憎悪症ともいふべき心の起つて来てどうしても除れないのはそのころからである。¹⁰

茂吉が、病者の自殺に対し苦慮し、憎悪という感情へと変容する心痛が読みとれる。さらに次のように続く。

そしてこの憎悪症ともいふべき稍病的な心状は精神病者の範囲のみならず、それを越えて普通人のあひだに對してまでひろがって行つた。それだから新聞の三面記事に載るものでも、いまいましく思ひ、『勝手に真似をしやがる』『餘計なことをしやがる』『生意氣な真似をしやがる』等ともいふべき下等な言葉を以てあらはし得べき心を持つやうにもなつてゐたことがある。芥川龍之介さんの死んだ時にも、ふとそんな心が湧いて私は強くそれを制したことがある。まだその時分には憎悪症ともいふべきものが心の隅に残留してゐたためであつたろう。

さうかうしてゐるうち、私は自殺者防禦に全力を尽した期間がある。実にいろいろのことをした。為てみると自殺者の数は前年に比して少くなり、或る年には一例もなくなり、次の年も次の年も一例もないといふ状態になつて来て、いついふことなしに憎悪症が薄らいで行つた。¹¹

茂吉は、自殺の憎悪が、院内の病者に止まらず、すべての自殺者への憎悪となつていく。新聞で自殺者の記事を読み、罵詈を浴びせ、自殺者への憎悪の感情は昂揚したのであつた。これは、まさに医者としての正義感の発露であり、社会的な正義への意思表示である。さらに、茂吉は自殺防禦の対策を講じた。加藤淑子は「茂吉の心には、患者によって加えられた癒し難い傷痕の数々が刻みつけられてゐたといへよう」¹²という。茂吉は「マルク会員の成功、失敗譚を訊く」¹³という座談会で、出院と自殺に関して次のようにいう。

出院即ち患者の逃走は東京は御膝元だからやかましい。長崎あたりは石田昇さんがオプンドアシステムなどといって威張つてゐた程ですから患者はしじゅう逃げてゐました。それでも県庁であまりやかましくありませんでした。逃走の方法も千差万別で、便所のきんかくしを壊したり、散歩中に釘を拾つて来て、それで板をはかしたり簡単に便所あたりは壊して出る、大工出の患者などはそんな事は容易にやつて除けます。自殺もいろいろですが、ストラングラチオン（縊死）が多い。場所は便所が多いが、中には蒲団を被つた儘やられたこともある。（略）

自分で首に帶を巻きつけて足で引いてでも、手で締めてでもやるのです。僕の取扱つた例は学生でしたが、窓の鉄棒に帶をかけて一方を頸に巻いてそれを脚でかうしてぐっと引っぱてやつたのがありました。私も失敗した。全く突然だったので。非常に信用をなくした。（略）

突如起すのがあります。衝動性という奴です。それかとおもふと、悲觀的の妄想などのために、実に長い間かかつて看護人のすきを狙つて計画してやるものもあります。今お話した学生の例なんかヒョイとです。予備行動も何も無かつたものでした。そんな風に帶を使ひますから、僕は帶でやれないやうに、帶を自分で考案して、女帶の芯を二枚か三枚合してボタンでとめるやうにして幅の広いものを作つたのです。これを安全帶などといって今でも使つてゐますが、成績がたいへん良好です。自殺されると、どうも第一氣持が好くない。（略）

ベッドでぶら下がらないで尻餅ついた儘死んだ
 のがある。窒息死だから、気が遠くなる程度で、
 もう事が済むんだね……。 (略)

監督官庁の警視庁では余りやかましく云はない
 が、家人にやかましいのが居て困ることがある。

14

自殺の具体的な方法などについての記載は、日記
 には無い。この座談会で挙げた学生の例のように、
 予備行動もない衝動的な事例では、医者として為す
 べき術もない。しかし、病院としては「非常に信用
 をなくした」という結果になる。また、茂吉は自殺
 予防の為に、「安全帯」を考案し、それが効果をあげ
 ている。茂吉の功績として、顕彰すべき事であるが、
 世に知られていない。このように、この座談会の内
 容は精神病医茂吉の素顔や病者への眼差しを見るこ
 とができる貴重な資料である。茂吉の粘着型の性格
 からすれば、何としても自殺を撲滅しようとする、
 執念が感ぜられる。ここでは、監督官庁の警視庁が
 余りやかましくないと言うが、それでも出頭要請が
 あり、かなりの心労であった。さらに、病者の家族
 の対応には、病院の責任者としての懊悩があったの
 である。また、茂吉は夜半過ぎに、病院から病者の
 自殺報告が電話であるため、電話恐怖症になった。
 『癡人の随筆』に「フォビア・テレフォニカ」とい
 う章がある。

大正十四年から大正十五年昭和二年三年あたり
 にかけ、私は電話の鈴の響が恐ろしくて為方の
 なかったことがある。

その恐ろしい事の一つは、夜半過ぎなどにかかる
 電話の多くは大抵病院の事故で、その事故の
 大部分は患者自殺の報告であったからである。
 自殺は一年に一つか二つに過ぎないのだけれど
 も、夜寝てから電話が鳴ると、もう動悸がし出
 して来る。階下で女中のこゑで、『いいえ、違
 います』などと云って受話機をかける音を聞き、
 ほっとした後までなかなか動悸のしづまらない
 ことなどもあった。自殺は年に一度か二度でも、
 そのために気を使ふことに一分の休みも無いか
 らである。¹⁵

電話恐怖症になった原因は二つあり、一つは自殺
 者の報告であり、一つは病院再建の為に借りた金へ

の返済の督促である。

この二つの電話でいぢめられたものだから、私
 はひどく電話の音が恐ろしくなって何とも為方
 がなかったものである。たまに信州の万葉の話
 などに行つて、電話の無い山中に寝たりすると、
 実に名状することの出来ない心の安定をおぼえ
 たものである。¹⁶

電話恐怖症になる程に、病者の自殺は律儀な茂吉
 を追い詰めた。紀一であるならば、病者の自殺は、
 精神病院にとって織り込み済みの事として、粛々と
 処理していくであろう。病院経営も軌道に乗り、安
 定してくると、茂吉の自殺憎悪や電話恐怖症も自然
 と解消するのであった。そして「私は観世音の守護
 を肌身離さず持つてゐたが、若し宗教家にそのこ
 とを話すなら、それは観音力のためだと云ったかも知
 れない」¹⁷という。このように、科学者であり、医
 者である茂吉が、金龍山浅草寺の観世音の加護を信
 じるのは興味深いことであり、茂吉の仏教観を考察
 する上でも重要であろう。

3. 茂吉の腎臓病と諸問題

1929 (昭和4) 年1月17日に、茂吉自らが尿を検
 査すると蛋白質が出た。日記には「一人診察。試ミ
 ニ尿ヲ検査シタルニ蛋白ノ反応著シ一寸悲観セリ、
¹⁸とある。18日には「1.検尿蛋白少シ、ソレヨリ試
 薬ノ沈殿ヲ解シタルニ相當ニ雲ノ状ニ濁リタリキ、
 (略) 3.午食ニぱんヲ食ス、ソレヨリ静カニ臥床シ
 テタニ至ル。」¹⁹とある。19日には「1.検尿ヲナス。
 朝食かゆ、(略) 3.午後安静ニ臥床ス。」²⁰とある。さ
 らに21日には「1.円タクニ乗リテ駿河台ニ行き、杏
 雲堂ノ佐々廉平君ノ診察ヲ受ク。ヤハリ Chronische
Nephritis ナリ。ソコデ養生ノ法ト薬トヲ教ハリ、」²¹
 とある。22日には「1.朝尿検査蛋白依然、」²²とある。
 このように茂吉は、慢性腎臓炎になっていた。なお、
 佐々廉平とは東京帝国大学医科大学での同窓であり、
 食事療法と養生法、薬(削剥液)を指示された。食
 事療法は続かず、すぐに止めてしまった。

茂吉は、1921 (大正10) 年7月6日欧州留学前の
 健康診断において、腎臓の異常が発見された。留学
 前の茂吉は、スペイン風邪で病臥に倒れたり、その
 後咯血したりと、極めて体調が悪い状態であった。

腎臓の異常は、その後遺症であったかもしれない。しかし、留学を延期する猶予もなかったので、学位取得の為に、腎臓の異常を不問にし、出発したのであった。茂吉は、脚の浮腫の病因を脚気によるものとし、オリザニンを服用した。また、出発前の夏には約1カ月、長野県の富士見高原で転地療法を行ったりした。そして、念願の欧州留学を果たし、学位を取得し帰国したが、その後は、火災による青山脳病院の再建、院長就任と続き、心身共に酷使し、自らの健康問題を棚上げにしたままだった。茂吉は、病院経営も一段落がついてきた昭和4年となって、検尿をしたのであった。医者である茂吉は、異常には気付いていたが、放置していたために、慢性腎臓炎となったのであった。柴生田稔は「昭和三年当時の茂吉の生活環境は、陰鬱な日々の営みのつひに病を発するまでに到った、曾ての長崎時代と同様の条件下にあったと言っているであろう。」²³という。

1925（大正14）年12月31日の日記には「神々ヨ、小サキ弱キ僕ヲマモラセタマヘ」²⁴とあり、1927（昭和2）年12月31日には「ドウニカソレヲキリヌケテ来タノハ神明ノ御加護ノタメデアル。先輩、知友ノ御カゲデアル」²⁵という。そして、1929（昭和4）年12月31日には、次のようにいう。

本年ノ最終日ナリ。午前中診察ニ従事ス。イロイロ家事多忙ナリ。午後本院ニ行ク。ソレヨリ西洋等ト銀座ニ買物ニ行キ、夜食ヲうなぎ（板坂、西洋、貞重等）ヲクヒ、ソレヨリカフェ太平楽ニテドイツビールヲノミテ、大ミソカヲ祝福。²⁶

大正14年からの昭和2年までが、茂吉にとって艱難辛苦の3年間であった。「神々ヨ」とか「神明ノ御加護」という言葉も散見する。それが昭和3年の12月31日の日記になると、病院や病者の記載は全くない。そして、昭和4年は、実に平穏な大晦日を過ごしている。銀座で買物をし、大好物の鰻を食べ、ドイツビールを飲み、大晦日を祝福した。このように、精神力で病に耐え、艱難辛苦の3年間を過ごした茂吉であるが、病院経営が安定すると、その緊張感がいささか弛緩し、自らの病気が気懸かりとなったといえよう。

なお、紀一の死後、茂吉にとって困惑する、紀一

の愛人問題という不行跡があった。山上次郎は「死ぬ前半にも妾に宮崎永野との間に問題があつてかなり困ったようである。が、紀一の死後はまだ一ヶ月もたっていないうちに、別の妾の溝呂木かねから莫大な金の請求を受ける」²⁷という。1928（昭和3）年12月11日の日記には次のようにいう。

3.ドクトル鈴木主計氏ヨリ電話ガアツテ「イツカオ話ノ妾ノコトニツイテドウカ御返事ガ承リタイ」輝子返事シテ『主人ハ今ツカレテ寝テ居リマス。ソレハ直接ニダンパンスルヤウニイタシマス』云々²⁸

12月13日には、「自動車ニテ鈴木主計氏ノ処ニ行キ、亡父ノ妾溝呂木かねヨリノ請求ハ4500円ダト云ツタ。正午マデカヽル。」²⁹とあり、24日には「輝子鈴木主計氏ヲ訪ヒ三千円ヲワタス、仮受取」³⁰とある。4500円を、何とか3000円で決着をみたのであろう。茂吉は、紀一の不行跡の後始末まで担当することとなったのである。院長として、財政逼迫にも拘わらず想定外の出費を強いられた。さらには、青山の地代の値上がりという土地問題もあり、錯綜する課題を、絡まった糸をほぐすように、一つ一つ解決を図っていった。茂吉には、負なるエネルギーを正へと転換する、逆境に耐える粘り強い潜在力（capability）が発揮されたのである。

4. 青山脳病院の現状

青山脳病院は松原を「本院」、青山を「分院」と称していたが、1929（昭和4）年になり、青山のバラックを壊し、新たに診療所と茂吉の居宅を建設した。1929年2月22日、松原本院の現状について「手帳十八」によれば、次のようになる。

定員 360名、現在 353名（二月廿二日）

代用患者 292名 176名（男）116名（女）

自費患者 62名 44名（男）18名（女）

看護人 有資格 5名 無資格 78名 合計 83名

看護人 男 52名 女 31名 合計 83名

医師 5名 薬剤師 2名³¹

医師5名の勤務担当日は、院長が月水金、斎藤平が月金、青木が木土、斎藤為が日火の夜、並河五郎が毎日とある。青木とは青木義作（1893～1988）で、紀一の妻ひさの弟の子どもである。妻輝子とはいと

こに当たる。斎藤平とは斎藤平義智（1891～1965）で、紀一の姉の子である。斎藤為とは斎藤為助（1894～1933）で、紀一の養子で、五女の愛子と結婚した。旧姓は高橋である。斎藤家一門により、病院は経営されている。とは言え、青山脳病院の規模と病院のスタッフが、充実してきたようだ。茂吉は本院の勤務が月水金となっているが、これは届け出上のことであった。岡田靖雄は「火水金の午前中は青山で診察し、水曜の午後本院にいき、ときにはそちらにとまる。もちろん、事があれば随時本院にいくが、かれの本拠は青山のほうである。」³²という。なお、紀一没後、義弟西洋が院長となるべきであったが、年齢的な事もあり、一人前になるまで茂吉が院長としての責務を果たす、いわば「中継ぎ」であったのである。

次に、「手帳十八」に精神病院に関連することが記されている。当時の状況を知る一端となる。

（二）訓練スルコト。○鐘ヲナラシテ。／○電燈、提灯。／○小峰。甲ニ出レバ乙ニ避難スル。消火栓、バケツ。砂嚢、／○池袋。マカナヒ。／アワテル。訓練スルコト大切デアル。非常召集。／○カク云フ時ニハドウスルカトキク／（略）

○笛ヲフク。バケツ、三ツ甲ノ場處ヨリ乙ノ場處。／○患者ヲチラシテモカマハヌ

○小峰病院。火鉢、鉄アミ。夜六時。夜十時ニ当直医ガマハル。／加命堂、六時。十時（医局）○事務五六人宿直、／○各病院ノ看護ハ医局、医局、事務ト共ニカントクシテキル。

○煙草ノマセヌ（山田病院）／○井之頭（巻草、一定個處。見張看護人ノ處、煙草ヲアヅカル。）ナルベク特定ノ場處／「マッチ」ノ注意／○漏電（会社ニヨリシラベテモラフ。）處ニヨリテハ毎月来ル。／電気協会（会費五円。年ニ二遍）／○退院患者ガ鍵。ネヂマハシ等ヲ入レル。／退院患者同志ノ面会ハワルイ。

○（七）公安上危険ノ懼アル患者ニタイシテハ看護人ヲ専属セシムル等適當ノ処置ヲトルコト（入院費用ノ関係上、出来ナイ場合モアルベケレドモナルベク注意を払ツテモラヒタイ）（見張ノソバノ部屋）

○（八）非常口ハ常ニ敢然ニシ且ツ避難ノ障礙

トナルベキ物品ヲオカザルコト且ツ非常口ノ鍵ハ所在ヲ明ニスルコト（略）³³

青山脳病院だけではなく、木造であった精神病院の火災が少なからずあった。岡田靖雄は「滝ノ川の王子病院は一九二三年一二月に病棟を半焼し、そのあとに内科・神経科の小峯病院をたてていた。（略）東京の精神病院では、一八七六年本郷区田町に設立された加藤瘋癲病院は、一八九八年に失火し焼死者六名をだしたことをはじた院長が廃院にした。また一九〇〇年牛込区若松町に開院した戸山脳病院は、一九二九年放火によって全焼し、患者一二名が焼死し閉鎖におこまれた。精神病院火災史は、一冊の本になるほどである。」³⁴という。当時の精神病院の火災は、近隣住民に対し過剰な不安を与え、公安上において由々しき問題であった。避難訓練の手順、防火体制の整備、煙草の件、非常口の注意事項等が箇条書きで記されている。漏電の注意も怠ってはいけない。当時の閉鎖的な精神病院では、逃げ遅れて死亡した病者も少なくない。なお、加命堂とは加命堂脳病院のことで、城東区亀戸町にあった。さらに続く。

○（九）医師、看護人ノ数規定数ニ満タザルアリ又医師専属ナラザリヤノ疑アリ。コレハレー行シテイタバク。／○一人タノンデ旅行シテハイカヌカ（ソレハオモテムキニハ行カヌ）／○院長ナドノ知ラザル者ニ無責任者アリ

○（十）往々、命令患者ニ対スル衣食ノ給与又ハ取扱方ニソノ当ヲ得ズト思フ向アリ。（衣類ハ汚穢、破レテキルトカ。一般社会ガ見テ 食物。／（衛生部長ハ眼鏡ナシ。若イ、面長デ、ヤサシイ人デアル。）／社会的ノ事業トシテ考へて欲しい。代用病院、遺憾ト思フ点ガ多イ。素人ガ見テ。

○（十一）手続ヲ要スル事項ニシテ故ナクコレヲ怠リ或ハ遅延スルコトアリ。充分ニ注意スルコト（医者ノ届出。看護人ノ出入等）

○（十二）病室付炊事場ノ清掃不十分ノモノアリ特ニ便所、汚水処方甚シク不適當ノモノアリ。加命堂ヨシ。土間、ト炊事場トノ境界ヲヨクスル、コレハ面白クナイ

○（十三）濫リニ病室内ニテ作業セシメル向ア

ルヲ以テ必ズ指定ノ場処ニテ作業セシメルコト／病室ニ布団ヲツミアゲルコトハ／（衛生部長ト学務部長ト）

（松澤氏）病院ノ管理人ヲキメヨ。（命令ヲ徹底セシメル要）責任者。／（二）注意簿。（警察ヨリ注意サレタル個所）（永久保存ノ）

○看護人ノ所定資格。看做シテ頂ココトヲ得。

（現在勤務、一年以上、身元確実ナルモノ）コレハ警視庁管内。病院内ダケ。所定ノ資格「精神病の看護法」、「衛生法規、消毒法、精神病者監護法。」免状ナシ、たゞ病院内ニテ作レバ警視庁

○火災報知機（患者イタヅラスルベシ）

これを見ると、看護人の資格について、免許がなくても警視庁管内で、精神病院だけに通用する資格があったことが分かる。1年以上勤務し、身元確実ならば、看護人として看做すことが可能であった。よって、青山脳病院でも無資格の看護人が圧倒的に多い。それでも、精神病院では看護人の人材確保には骨を折った。裏返して言えば、精神病院の看護人に対する払拭しがたい、人々の否定的な眼差しが存在したのであった。待遇においても、看護人は最低であり、労働争議も起きた。1932（昭和7）年5月20日の日記には「神田連雀町ノ医師会館ニノゾム。保養院ノ看護人争議ノ件ナリ。板坂亀尾同道ナリ。」³⁵とあり、同月25日には「午后本院ニ至リ。保養院ノ事務長、看護人代表来ル。院代アフ。紅茶ノ出方オソイト云ツテ僕大ニ怒ル。」とある。紅茶の出方で「僕大ニ怒ル」とは、いかにも癪癪持ちの茂吉らしい。なお、保養院は豊島区西巢鴨にあった。1933（昭和8）年4月24日には「根岸病院ノ争議ドーニカ片ヅキタラシ。」³⁶同月25日には「根岸病院争議持越し」³⁷とある。なお、根岸病院は下谷区下根岸町にあった。岡田靖雄は「戦前の医療労働運動史では、精神病院における労働争議が比較的突出していた。松沢病院でも何回かそれがくりかえされた。（略）一九三三年の根岸病院における争議は、看護人が患者に傷つけられたのを私傷としたことから、男女看護人、賄いがたちあがった。ここでの労働運動は全国労働組合同盟（日本労農党系、中間派）に属するものであった。（略）一九三六年には保養院で、飲酒し

て交通事故をおこしたボイラー係の解雇から労働争議にいたった。」³⁸とある。青山脳病院では、労働争議にはならなかったが、院長として、頭を悩ますことである。看護人の待遇改善は焦眉の課題であり、国の精神医療の政策が問われているのである。

また、便所の衛生管理が取り上げられている。おそらく臭気の事も問題となったであろう。

また、病院には招からざる来訪者もある。1927（昭和2）年7月26日の日記には次のようにいう。丁度「精神病院長ノ召喚」が新聞に載り、患者の逃走があった時期である。

中央新聞記者、（丸の内山下町）中村銀作ト云フ者来リ、投書ガ入ツタカラト云フ談合。イロイロ質問シテ約一時間ニナル、シマヒ二十円グラキ自動車賃ヲヤラウカト云ヒシニイヤ、23百円欲シイト云フ。ソレハイカナイ、サウイフコトヲスレバ私ノ方ニ悪イコトノアルタメニ、ソレヲ塗りツブス料金トシテ払フヤウナモンダ。サウイフ君ノ考ナラバ明ルミニ出シ玉ヘト云ツテ帰シタ。³⁹

また、同年7月5日の日記には次のようにいう。

相当ニ忙シイノニ帝国聯合調査会ノ横山ト云フ男来リテ会員第四種（五十円）ニ入会セヨト云ヒ、ヅンヅン筆ヲ取ツテ承託（ママ）書ト受取書ヲカク、カウイフ寄生虫ノ如キモノハ実際困ルノデアルガ、オヤヂハ第二夫人ヲ持ツテキルトカ、「何シロほうきナンデスカラヒドイ」「五十円ハ安イデスヨ」「安カツタトオ父サンガ云ヒマスヨ」ナド、云フ。心身疲労シテキルノニカウイフコトガアルト実際疲レルノデ午後寐タ。⁴⁰

このような来訪者の対応も、院長の責務となる。世間で言う、「強請、集り」の輩を毅然とした態度で、追い払わなければならない。

1932（昭和7）年になると、松原「本院」がある府下松沢村松原が、東京市世田谷区に編入された。そこで「世田谷」の歌15首をつくった。

松澤病院

ものぐるひここに起臥しうつせみに似ぬありさまもありとこそいへ

おそるべきものさへもなく老いゆきて蘆原金治郎はひじりとぞおもふ

青山脳病院

茂吉われ院長となりいそしむを世のもろびとよ
知りてくだされよ⁴¹

(『石泉』昭和7年「世田谷」)

蘆原金治郎は、蘆原将軍と称された、かの有名な誇大妄想患者である。「茂吉われ」の歌は、院長となり、精神病の臨床医として、このように艱難辛苦を乗り越えている茂吉の姿を、世人に少しでも知って欲しいという、やや自虐的な歌である。その他に、次のような歌がある。

気ぐるひし老人ひとりわが門を癒えてかへりゆ
く涙ぐましも

(『白桃』昭和8年「早春独吟」)

茂吉は、『作歌四十年』で、次のように回顧している。

自分は精神病医だから、これまで随分沢山の病者を診療している。その千差万別のむつかしい病者のうち、この老人の精神病患者が全快して退院したとき、非常に自分も嬉しく感動したのでこの一首を作ったが、この歌はわけもなく直ぐ出来た。『涙ぐましも』の結句は今ではもう珍らしくないが、この歌では割合自然に据わっているように思う。またこういう歌は身辺小説のようなもので大作とは謂えぬが作者自身にとっては未練のことが多い。精神病医は多くの場合感謝せられざる医であるから、こういう場合には先ず珍しい特殊の場合と謂わねばならない。

⁴²

また、次の歌がある。

朝ざむきちまた行きつつものぐるひの現身ゆゑ
に心しづまらず
ひと夏に体よわりしが冬服をけふより着つつ廻
診し居り
まちかくに吾にせまりて聞くときは心は痛しもの
ぐるひのこゑ

(『白桃』昭和8年「朝寒」)

『作歌四十年』で次のようにいう。

東京に帰って来て、いつものように医業に従事した。そしてあずかつて居る病者のことをおもうといろいろと気を使うことがあってぼんやりしては居られない。きょうははじめて冬服にな

って廻診をした。既に医者になってから三十年近いちおもうし、専門医として相当の修練も積んだとおもうが、それでもこの身に近く、妄想に本づく要求を執拗にも執拗に迫って来られると、心を痛ましめないことがない。それを、『心は痛しものぐるひのこゑ』と表したのであった。

⁴³

茂吉は、1931（昭和6）年12月31日の日記に、次のようにいう。

世間ハ僕ヲニクミ目ノ上ノ敵トシタガ、力量ニ於テ僕ヲ征服デキズニシマツタ。病院長トシテモ、アレハ歌ヨミデ医者デハナイナドト云フガコレモ力量ニ於テ實際ノ成績ヲアゲルノダカラ信用ガアルノdeal。スベテ神明ニ感謝シ心シヅカニ今年ヲ終リ。新年ヲ迎ヘヨウ。⁴⁴

茂吉は、「歌ヨミデ医者デハナイ」というような世人の批判が無いように精進し、院長としてもその重圧をはね除け、世人から信用を得た。とは言え、1932（昭和7）年11月30日の日記にあるように、突然の警視庁からの出頭要請があった。

本院ノ板坂ヨリ電話アリ、警視庁ヨリ出頭セヨトノコトナリトゾ。板坂ト二人出頭シタルニ、1患者ノ分配ヲモツト完全ニスルコト、一処ハコミ一処ハアキキル、2患者ト看護人トノ人数ハ合ハヌコト、3布団ノキタナキコト等、シカシ万事ハ算術的ニシテ情味ナシ、ソレユエ實際的デナク面倒ナリ

岡田靖雄は「かれはたいへんに努力して医業にもあたり、(略)精神鑑定もかなりおおくやっているし、往診にもはげんだ。だが、つきはなしていえば、歌人にしては院長として頑ばっているが、本来ならば院長業務にもっと力をいれるべきでなかったか。」⁴⁵と辛口に批判している。確かに岡田の批判は完全には否定できない。しかし、次期後継者たる西洋が一人前になるまでに期間と覚悟して、決して手を抜くことなく院長として、臨床医として、さらには高名な歌人として、茂吉は立派に仕事を為したのであった。しかも、腎臓病の養生を十分にする時間的余裕もなかった。岡田の要望は、歌人茂吉の否定でもあり、さらには茂吉の艱難辛苦に対する過小評価にすぎない。なぜ、そこまで茂吉を批判することに拘泥

するのであろうか。

5. 精神的負傷

青山脳病院副院長であった青木儀作が、次のように回顧している。

昭和八年十一月のある日先生は私を書斎によんで、自分は家族の事情で今度院長をやめたいから君が代って院長になってくれと沈痛な面接で云はれた。しかし私はかくまで深刻に悩んでゐる先生の心情を察し、かつ今迄の恩顧を思ふとき、どうしてもこれを受諾する気にはなれなかった。そして私の出来ることなら何でも先生に代ってやりますから院長の名義だけは其儘にして頂きたいと申し上げて辞退したのであった。かくして先生は本院分院とも週一回診察するだけで、病院のことは殆ど私と事務長とにまかせられた。⁴⁶

茂吉のいう「家族の事情」とは、妻てる子に関する「ダンスホール事件」であった。歌集『白桃』の後記に「昭和八年、昭和九年は私の五十二歳、五十三歳の時に当る。然るにこの両年は実生活の上に於て不思議に悲嘆のつづいた年であった。昭和八年十月三十日に平福百穂画伯が没し、昭和九年五月五日に中村憲吉が没した。さうして私事にわたってもいろいろの事があつた。私のかかる精神的負傷が作歌に反映してゐるとおもふ」⁴⁷という。歌友の平福百穂、中村憲吉の死亡もあるが、「私事にわたってもいろいろの事」が茂吉にとっての「精神的負傷」であった。「ダンスホール事件」とは、銀座のダンスホールの某不良教師が検挙され、それに関わった女性の一人として、茂吉夫人てる子が推測されるたのである。昭和8年11月8日の『東京朝日新聞』の記事には次のようにある。

医博課長夫人等々 不倫・恋のステップ
銀座ホールの不良教師検挙で
有閑女群に醜行暴露

京橋区京橋二の八、銀座ダンスホールの教師エディカンター事、田村一男（二四）は同ホール常連の有閑マダム、令嬢、女給、清元師匠、芸者等を顧客に、情痴の限りを尽し目にあまるその不行跡に警視庁不良少年係も捨て置けず七日遂

に同人を検挙、取調べるとこの不良ダンス教師をめぐる有閑女群の中には青山某病院長医学博士夫人などの名もあげられ、醜い数々の場面を係官の前にぶちまけている。

軍靴の登音が聴こえる世相もあり、4本の見出しが煽情的である。「青山某病院長医学博士夫人」では、個人情報保護などなく、斎藤てる子の事である。記事はさらに続く。

田村もニューヨーク・レビュー界の人気者エデー・カンターの名をもちりその美貌と女性を魅するウインク、それに際立って巧なダンスの相手振りに女を惑溺さしてみたもので警視庁当局のいふところでは、同人は元カフェ・クロネコの女給某（二五）と同せいでゐるうちに銀座裏カフェ・ベルスの女給某（二一）新橋の芸者某（二三）赤坂溜池の清元師匠某（二八）、大阪、阪神電鉄会社の某課長夫人、千葉県八日市の資産家某の令嬢、某会社専務夫人、青山某病院長医学博士夫人等の名が彼の取巻き常連として並べられ、阪神電鉄某課長夫人は彼と一回踊ってチケット五十枚、某令嬢は百枚、某会社専務夫人は五十枚を惜しげもなく彼の手に握らせて歓心を買ひ、その中でも某病院長夫人の如きは余りに頻繁なホール通ひにお抱へ運転手にも遠慮して円タク又は三越から態々地下鉄で通ひ、甚だしい時は午前十時前に来て田村の出勤を正午迄待ち、更に共に昼飯後三時迄踊り抜いても飽き足らず、夜も現れて派手な好みの洋装で全ホールの人目をひきつつ踊り続けるといふ有閑マダム振りを発揮、田村と共に食事を共にする他に昨年以来横浜市磯子の待合、田端の料理屋、多摩川の待合等を遊び回りダンスホールでも相当評判を高めてゐるといはれ、博士夫人も七日警視庁に呼びだされ、その行状を聴取された、田村は右のやうなやり方で月収三百円を下らず豪勢な生活をしてゐたものである。

「青山某病院長医学博士夫人」以外は、すぐには個人名を特定できない。某院長夫人の行動が詳細に載っている。新聞記事を読むと、検挙された田村一男の一方的な話であり、真偽は不明であるが、時局を考えるならば、スケープゴートのダンスホール

事件を喧伝し、風紀の肅正を図ったとも受け取れる。山上次郎は「この事件はいまから見ればさほどのことでもないが、上流社会のスクandalとして、中央の大新聞に出たのと、この中に茂吉夫人とともに伯爵吉井勇夫人が含まれていたために一層大きい波紋を呼んだのである。」⁴⁸という。当時の男性優位の社会では、恰好の醜聞として耳目を集めたのである。さらに、てる子の談話まで載っている。

「不眠症治療に いつもリード」

某病院長夫人語る

困ってしまひましたわ、男妾だの、何だのといはれて・・・食事を共にしたこともあり、横浜まで大勢でドライブしたこともあります、その時もダンスに行った迄でいまはしい関係なんかありません、金銭的補助といっても御礼を多くした位でそれ以上のことは致しませんよ、それ程財政的に余裕なんかありません、ダンスを始めたのは一昨年夏で、元来が不眠症で困ってゐたのでダンスでもしたら・・・と主人にも勧められてやり出したのですが別段不眠症の方に効果がなかったし、主人もダンスホールの芳しくない噂に出入をとめたので今春来参りませんでした、田村はいはば田舎のモボみたいで低級ですが、いつも時間を割いてリードしてくれる男で別にそれ以上に何の関心も持ってゐません、何かためにする者がデマを飛ばしたのもらしく本当に飛んだ災難ですワ

敢えて論評を控えるが、茂吉の衝撃はいかばかりであつたであろう。茂吉の反応を見ると、同年 11 月 13 日、中村憲吉宛の書簡で次のようにいう。

拝啓御芳情忝しとも忝し小生も画伯に死なれ□□□□□□□□□□(十二字削除)正に昏倒せり 画伯の葬儀をはりて疲労臥床必要のところを無理に診察し、上野に画伯のアイヌをみに行つた留守の出来事也、小生も不運中の不運男なれど今更いかんともなしがたし、大兄の御手紙よみて涙流れとゞまらず目下懊悩をば何にむかつて慇へむか御遙察願ふ、大兄の御心中乱すこと恐れ恐る 願はくは御ゆるしあれ⁴⁹

その後、新聞記事も続き、11 月 16 日には「情痴の乱舞場から またも不良検挙 フロリダ出入の佐

藤」という見出しで、銀座ダンスホールに続きフロリダ・ダンスホールに飛び火した。さらに 11 月 18 日には「文壇人に恐慌来！ダンスホール事件急転」「妾宅で賭博中の里見弴氏等を検挙 吉井伯夫人の取調で 遊び仲間の裏面暴露」「有閑マダムも混り 玄人めいた開帳 里見氏など大しよげ」「これが伯爵夫人！無恥・係官を驚かす 男性交換など朝飯前」

吉井伯爵夫人とは、吉井勇の夫人徳子のことである。この事件後、茂吉の日記は 11 月 7 日から 13 日まで空白となっている。11 月 27 日には「ウイスキー飲み。夜半ニ夢視テサメ胸苦シク、動悸シ如何トモナシガタシ。コノママ弱リ果テテ死ヌニヤアラントオモフバカリナリ。」⁵⁰といい、12 月 3 日には「胸内苦悶アリ。時々心音不整トナル」⁵¹という。

結果的には、この事件で茂吉とてる子は別居することとなった。てる子は、母の生家の秩父や、茂吉の実弟高橋四郎兵衛が経営する上山の山城館に預けられるが、母や弟の西洋らと共に青山脳病院本院で生活した。茂吉は青山の分院で生活した。昭和 20 年まで、別居生活が続くことになった。なお吉井勇は離婚した。

6. まとめ

茂吉は、ダンスホール事件後、謹慎し、青山脳病院院長を辞する決意であつた。青木義作副院長により慰留され、本院分院とも、週一回の診察となった。茂吉とてる子は、全く相反する性格で、てる子の行動が、茂吉を激怒させ、あるいは神経質にさせた。茂吉にすれば、漸く病院経営が軌道に乗り、今までの艱難辛苦が報われ、心が少しずつ安寧となる時であつた。茂吉の辛抱も臨界を越えた。しかも恬淡とした、てる子の性格から推察するに、新聞に記事が載つたことに対して、それ程の衝撃もないし、まして世人に糾弾されるような行動とも思っていない。茂吉は、すべてを放下し、無一物となりたかつたであろう。離婚し、青山脳病院とも訣別する選択肢もあつたはずだ。しかし、茂吉は踏み止まった。一人の医者として、病者を家庭の事情により捨て置かないのは、崇高な医者としての職業倫理に裏付けられた茂吉の病者への配慮であろう。

- ¹ 北杜夫『青年茂吉―「赤光」「あらたま」時代』岩波現代文庫、2001 年、55 ページ。紀一は「ああ、君の脳は腐っている。大丈夫、ぼくがちゃんと治してあげる」などと言った。
- ² 斎藤茂太『いい言葉はいい人生をつくる』成美堂出版、2005 年、55 ページ。
- ³ 『斎藤茂吉全集』第 29 巻、岩波書店、1973 年、613 ページ。
- ⁴ 同巻、621 ページ。
- ⁵ 同巻、621～622 ページ。
- ⁶ 岡田靖雄『私説 松沢病院史』岩崎学術出版社、1981 年、502 ページ。
- ⁷ 同書、同ページ。
- ⁸ 第 29 巻、609 ページ。
- ⁹ 同巻、588～589 ページ。
- ¹⁰ 第 6 巻、472～474 ページ。昭和 12 年、雑誌「改造」1 月号に掲載。
- ¹¹ 同巻、474 ページ。
- ¹² 加藤淑子『斎藤茂吉と医学』みすず書房、1978 年、160 ページ。
- ¹³ 「マルク会員」とは、1909 年に東京帝国大学医科大学を卒業した同級会である。09 をマルクと読む。出席者は、茂吉の他に、出井淳三、佐々廉平、田澤鏝二、福岡五郎、広瀬渉、宮田誠雄である。昭和 16 年、雑誌「臨床の日本」1 月号に掲載。
- ¹⁴ 第 29 巻、632～633 ページ。
- ¹⁵ 第 6 巻、475 ページ。
- ¹⁶ 同巻、476 ページ。
- ¹⁷ 同巻、同ページ。
- ¹⁸ 第 29 巻、606 ページ。
- ¹⁹ 同巻、同ページ。
- ²⁰ 同巻、同ページ。
- ²¹ 同巻、607 ページ。
- ²² 同巻、608 ページ。
- ²³ 柴生田稔『続斎藤茂吉伝』新潮社、1981 年、271 ページ。
- ²⁴ 第 29 巻、149 ページ。
- ²⁵ 同巻、456 ページ。
- ²⁶ 同巻、693 ページ。
- ²⁷ 山上次郎『斎藤茂吉の生涯』文藝春秋、1974 年、307 ページ。
- ²⁸ 第 29 巻、588 ページ。
- ²⁹ 同巻、589 ページ。
- ³⁰ 同巻、595 ページ。
- ³¹ 第 27 巻、373 ページ参照。
- ³² 岡田靖雄『精神病医斎藤茂吉の生涯』思文閣出版、2000 年、271 ページ。
- ³³ 同巻、373～374 ページ。
- ³⁴ 岡田靖雄『精神病医斎藤茂吉の生涯』243～244 ページ。
- ³⁵ 第 30 巻、157 ページ。
- ³⁶ 同巻、264 ページ。
- ³⁷ 同巻、同ページ。
- ³⁸ 岡田靖雄『精神病医斎藤茂吉の生涯』276 ページ。
- ³⁹ 第 29 巻、384 ページ。
- ⁴⁰ 同巻、373～374 ページ。
- ⁴¹ 「茂吉われ」の歌碑は、青山脳病院本院を引き継いだ東京都立梅ヶ丘病院の門前にある。
- ⁴² 斎藤茂吉『作歌四十年』筑摩叢書、1971 年、209 ページ。
- ⁴³ 同書、235 ページ。
- ⁴⁴ 第 30 巻、111～112 ページ。
- ⁴⁵ 岡田靖雄『精神病医斎藤茂吉の生涯』273 ページ。
- ⁴⁶ 『アララギ』斎藤茂吉追悼号、アララギ発行所、1953 年、48 ページ。
- ⁴⁷ 第 2 巻、645 ページ。
- ⁴⁸ 山上次郎、前掲書、359 ページ。
- ⁴⁹ 第 34 巻、239 ページ。
- ⁵⁰ 第 30 巻、326 ページ。
- ⁵¹ 同巻、328 ページ。

(Received: September 30, 2010)

(Issued in internet Edition: November 1, 2010)